

体験談④

『私の戦争体験談』

和泉 清(いずみ きよし) 91歳

私は15歳の旧制中学3年生山口県の下関市で終戦を迎えた。学徒動員で派遣されていた市外の或る金属精錬工場前庭で、昭和天皇のポツダム宣言受諾を告げるラジオ放送を涙ながらに聞いた。反面、その日以来、安眠を妨げる空襲警報、B29の爆音から解放されて安堵を覚えたものである。

戦時中、中学生、女学生は、入学と同時に春秋の農繁期には勤労奉仕と称して、近郊農家へ田植えや麦、稲刈りに派遣された。3年生になると学徒動員令に基づいて、航空機製造など各種軍需工場出向を命じられた。勤労奉仕は短期間であったので、終われば学校に復帰出来たが、動員は週6日労働の連続であったので、授業は殆んど受けられなかった。

自宅は幸いにして焼夷弾爆撃を逃れたが、市内中心部はほぼ全焼した。以後、B29爆撃機の狙ったのは機雷投下による関門海峡封鎖であった。朝鮮半島から本土への最短距離にある関門港には満州、朝鮮からの穀物の他、戦略物資が陸揚げされていた。アメリカの作戦は見事に成功し、以後、毎日の如く貨物船の触雷沈没が続いた。朝の工場出勤時、沈没船からと思われる乗員の死体が、海岸に漂着しているのを何度か目撃して、目を背けたものである。

同じ工場には旧制高等学校生も働いていたが、彼らは故郷を離れての寮住まいで

あった。時に万年床のままの彼らの部屋に招かれ、年長先輩から大人の世界の片鱗をこっそり教わったものである。彼らの情報網はさすがであった。ある日、絶対口外するなと念を押された上「日本は、近いうちに負ける」と告げられた。「神州不滅、神風の襲来」を盲信していた軍国少年にとっては物凄いショックであった。

以下は、あるいは私の人生を変えたかもしれない体験談である。

その1)当初は味方の対空砲火も戦闘機迎撃も激しかった。火を噴いて落下するB29を軒下から眺めていたところ、突然、瓦半分大の高射砲弾破片がビューンという音とともに足元に落下したのち大きくはねた。(注:6月~7月以降は、迎撃能力殆ど喪失)

その2)農作業中のある朝、カタカタというプロペラ音を立てて小型機の急襲である。見上げると低空飛行の艦載機が地上射撃をしつつ、目前に迫っている。はっきりと搭乗員の姿が見えた。きっと相手は面白がってか、一少年を標的にしたのだろう。

もしもである、高高度からの砲弾破片か、または、超至近距離よりの機銃弾の何れかが命中していたらと、思い出すと鳥肌が立つ。

生きのびた余生は大切にしたいものだ。

最後に、「失敗の本質」(中央公論新社)が、第二次大戦敗戦の原因として、根拠なき楽観主義、不明確の目標、戦力の逐次投入を挙げていること、さらに、開戦前に或る特殊機関が行った研究では、「日本は緒戦の奇襲攻撃で勝利するが、国力の差から劣勢となり、敗戦に至る」との記録があることを付記しておきたい。